

本校では、昨年度より研究主題を「『対話を通して、主体的に学習しようとする児童の育成』～主に生活科・理科の学習を通して～」とし、研究を進めてきた。2年間の研究、及び今回の研究授業の成果として次の二点が挙げられる。

一点目は、主体的に対話しながら学習することができる児童が増えたことだ。児童が相互指名のリレー形式で発言することにより、意見の交流が活発になり、児童が対話しながら授業が進んでいくようになってきた。理科の学習においては、予想を検証するために観察・実験を行う。そしてその観察・実験の記録を通して、より妥当な考えを追究していく。そのためには、科学的な視点で検証できるように、量的にも質的にも十分なデータが必要になってくる。児童はそのことを理解し、友達の考えに追加できる部分があれば、「〇〇さんの意見に付け足します。」と、より多くのデータを集めようとする姿が多く見られるようになってきた。また、友達の考えに納得できない時は、「〇〇さんにお尋ねします。私は～だと思うのですがどうでしょうか？」と疑問を投げかけ、自分が納得するまで話し合いを行ってきた。そういったことを繰り返していくうちに、妥当な考えを児童自ら生み出せるようになってきた。また、理科だけでなく他教科の学習においても、児童が対話しながら問題解決する授業が増えてきた。

二点目は、理科の見方・考え方を深めることができた点である。観察・実験の計画を話し合う時に、「それは条件が2つ以上変わるから、良くないんじゃないかな？」と疑問をもつ児童が増えた。条件制御の考え方を意識させたのは昨年（5年生）からで、適切に条件制御の考えを理解できている児童は少ない印象だった。しかし、「実験する時に変えて良い条件っていくつまででしたか？」と理科の見方・考え方を意識した言葉かけを続けることで、児童は次第に条件制御の考え方を身に付けていくことができた。また、観察・実験の結果を検証する際、事象を比べたり、関連させたり、多面的に捉えたりできている児童の意見を価値付けていくことで、児童全体の理科の見方・考え方を深めていくことができた。加えて、今回の研究授業では特に「科学的であるか」ということを児童に意識させてきた。理科の学習において「感覚」や「何となく」では、不十分であることを理解させることができた。

課題としては、次の二点が挙げられる。

一点目は、主体的に対話できる児童が増えてきたものの、自力で考えをつくったり、それを表現したりすることが難しい児童がいることである。理科以外の教科の学習でも、分からないときや困ったときは友達と相談しても良いとしているが、相談することに抵抗があったり、自分から相談できなかつたりする児童がいる。特に、予想を立てたり、実験結果から考えられることを記述したりする場面で何もできず固まってしまう。児童の実態を細かく分析し、児童への考えのもたせ方についても研究を進めていきたい。

二点目は、児童の意見を構造的に板書していくことに課題が残ることだ。児童の意見を板書し、図や表なども活用しながら構造的な板書を目指して研究を進めてきた。しかし、いざ板書を始めてみると、ただ児童の意見を板書しているだけになってしまうことがある。予想される児童の意見を事前に十分考えておき、児童が考えを整理できるような板書ができるように、これからも研究を進めていきたい。